

『歎異抄』第2条（前編） ～念佛に生きる～

■門弟達の命がけの問い

おののおのの十余箇国のかかひをこえて、身命をかへりみずして、たづねきたらしめたまふ御こころざし、ひとへに往生極楽のみちを問ひきかんがためなり。

あなたがたがはるばる十余りもの国境をこえて、命がけでわたしを訪ねてこられたのは、ただひとえに極楽浄土に往生する道を問い合わせたいといふ一心からです。

十余箇国のかかひをこえて

⇒ 約600キロ

（日数にすると少なくとも20日前後かかる）

命をかけてまで聞こうとしたのが、「往生極楽の道」。なぜ命を賭してまで上洛しなければならなかつたのか？



■第2条について

（梯 實圓『聖典セミナー歎異抄』67～68頁）

『歎異抄』のなかでも、とくにこの第二条は、ただならぬ雰囲気をもったドラマチックな法語です。

まず北関東から京都まで、十余カ国をこえ、数百キロにのぼる危険な旅をつづけて、親鸞聖人をたづねてきた幾人かの念佛者たちの思いつめた鋭いまなざしが感じられます。彼らは、極楽に往生してゆくほんとうの道すじを問い合わせますという、ただひとつの目的に、いのちをかけている求道者たちでした。それもただ念佛の教えに疑いをもつてはいるだけではなく、親鸞聖人自身についても、はつきりと問い合わせておきたい疑惑をいだいていたようです。

そのせいでしよう。彼らの問い合わせを受けて立つ聖人の応答の姿勢には、つねなみとはおもえない、きびしさがみうけられます。それは単に門弟を教えさとす師としての態度ではなく、自分自身の念佛の信心を真剣に、率直に告白し、証言するかのようにみえます。…（中略）…

この法語の背後には、問いただすものにも、応答される側にも、命がけにならざるを得ない状況があったに違いありません。

■第2条の背景

①日蓮上人(1222—1282)の念佛批判

四箇格言 「念佛無間 禅天魔 真言亡国 律国賊」

無間地獄(阿鼻地獄)…

八大地獄の中で最下層にあり、最も苦しみが大きい地獄。

到着するまでに2000年。到着後は計り知れない長い間、

間断なく(無間)責め苦を受ける最恐の地獄。



日蓮上人



◇釈 徹宗『親鸞の教えと歎異抄』89頁

日蓮は『法華経』への信心以外に救われる道はないと主張し、さまざまな迫害も乗り越えて、人々に大きな影響を与えていました。日蓮の四箇格言によれば、「念佛無間、禅天魔、真言亡国、律国賊」となります。

念佛する者は無間地獄という最悪の地獄に墮ちる、禪は悪魔の所行である、真言は国を滅ぼす教えである、そして律(奈良仏教)は国賊である、と他宗派を厳しく批判したのです。特に当時の大衆の支持を得ていた浄土仏教の念佛への攻撃は非常に激しかったようで、関東の門弟たちにもそういう日蓮の声が聞こえていたのかもしれません。

②善鸞事件

※親鸞聖人が帰洛した後の関東の状況…「造悪無碍の異義」

「どのような悪人でも救う本願があるのだから、悪を造ることを恐れるな。悪は思うさまにふるまえ」と主張。造悪無碍は、ときに非常に危険な反倫理的・反社会的集団を生み出す危うさがあった。

⇒ 事態の沈静化を図って、長男の慈信房善鸞を東国へ派遣



慈信房善鸞

■関東門弟の状況

性信の横曾根門徒、真仏・顕智の高田門徒、順信の鹿島門徒など、有力な門徒集団がすでに形成されていた。関東の門弟たちは、善鸞を親鸞聖人の使者として迎え入れたはしたが、指導者として受け入れたわけではなかった。

⇒ 善鸞自らが門徒集団のリーダーになり、名声や生活基盤を得ようという野心が生じた? 善鸞の説く言葉に対し、違和感を覚え始めた門弟たちは反発

■善鸞の主張

「あなた方は父の本意を知らないだけだ。私は父親鸞から特別の法門を夜ひそかに伝授された」と主張。

『親鸞聖人御消息』第8通

まづ慈信（善鸞）が申し候ふ法文のやう、名目をもきかず。いはんやならひたることも候はねば、慈信にひそかにをしふべきやうも候はず。また夜も昼も慈信一人に、人にはかくして法文をしつへたること候はず。

■事件の顛末

善鸞が嘘偽りの法門を説いたことによって、東国の門弟たちにさらなる混乱を招くこととなった。この真相が明らかになり、親鸞聖人は善鸞を義絶する旨を、善鸞自身と東国の門弟に宣言。

『親鸞聖人御消息』第9通（善鸞義絶状）

阿弥陀仏の第十八願をしほんだ花にたとえたことで、人々はみな本願を捨ててしまつたと聞いていますが、これはまさに謗法の罪であり、また、五逆の罪を進んで犯し、人をおとしめ惑わしていることは、悲しいことです…《中略》…こうなつては、もはやわたしは親ではありません。あなたが子であるという思いも断ち切りました。仏・法・僧の三宝と神々に、はつきりと申し上げました。悲しいことです。

善鸞の言動を知った親鸞聖人は、教えを護るために善鸞を義絶することを決断。建長8年（1256）5月29日、親鸞聖人84歳、善鸞50歳頃の時の出来事。

この一連の出来事を「善鸞事件」という。

山田雅教「入門講座 はじめて学ぶ親鸞聖人のご生涯」

（『季刊せいてん』8号）

親鸞聖人は、善鸞の所業を「五逆罪（無間地獄へ墮ちるとも言われる五つの重罪）」にも等しいとして、義絶されたのです。聖人はこのとき八十四歳。「かなしきことなり」と記されたその心中は察するに余りあります。また善鸞も、結構な年齢になっていたはずですが、どんな想いでいたのでしょうか。（中略）

なお、善鸞を義絶したこと述べたこのお手紙に関しては、偽作だという説も言われています。しかし、聖人のご真筆は伝わらないものの、高田の顕智という信頼すべき高弟が書写していることから、偽作説は成立しがたいと考えられます。

■第2条の背景（まとめ）

親鸞聖人が帰洛し、80歳を過ぎた頃、関東では「造惡無碍の異義」が生じており、事態の沈静化を図って長男の善鸞が派遣されるも、さらなる混乱を招いた。念佛の教えに動搖する関東の門弟たちは、聖人へ直接、「往生極楽のみち」を尋ねる為に「十余箇国のかひ」を超えて上京。唯円もその一人であったと推定。



■関東での善鸞

従覚『慕帰絵』（覚如の伝記） ※従覚…本願寺第3代宗主・覚如上人の次男

慈信房（善鸞）は、だいたいが親鸞聖人の使者として関東へ派遣されたのに、信仰生活・在俗生活いずれにおいても親鸞聖人の教えとは異なる振舞方をされました。しかし神社の神官や巫女の頭となりましたので、このような罪と悪とを多く背負っている者たちに近づいて、彼らを助けようとしているのだろうかと不思議に思うのです。

乗専『最須敬重絵図』（覚如の伝記） ※乗専…覚如上人の高弟

最初は親鸞聖人の使者として関東へ下り、念佛の教えの布教に当たり、片田舎の指導者になられましたが、のちに教えの内容を変え、その上、神社の巫女たちにも付き合ったりして、仏教修行の道に外れ、外道（仏教以外の教え）の尼乾子（ジャイナ教の祖）のようになってしまったので、親鸞聖人も門弟の一人とは思われませんでした。

『慕帰絵』第4巻

覚如上人が若い頃に、関東の親鸞聖人遺跡を巡っていたところ、ある大豪族が僧侶ら200～300人、引き連れている場面に遭遇。その中に善鸞がいたという。

「かかる時も他の本尊をばもちみず、無碍光如来の名号ばかりをかけて、一心に念佛せられるとぞ。」

■親鸞聖人の著述時期と善鸞の存在

親鸞聖人は90年の生涯で、63点にも及ぶ書物などを執筆・書写している。このうち81歳までに14点（全体の約22%）。82歳から86歳までの5年間で45点（全体の71%）、そのうち、83歳から85歳まででは38点（全体の60%）。生涯に執筆したうちの5分の3は、83歳から85歳のわずか3年間に集中している。

⇒ この3年間に何かがあった ⇒ 善鸞の問題

※善鸞の存在と、聖人晩年の著述活動とは無関係ではない